

志賀直哉全集

第六卷

志賀直哉全集 第六卷

第四回配本(全十四卷・付別巻)

昭和四十八年八月二十日 發行

定價 二千四百圓

著 者 志 賀 直 哉

發行者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

落丁本・欄丁本はお取替いたします

目次

「暗夜行路草稿」

草稿 1	………	三
草稿 2	尾の道に行くまでの事	一五
草稿 3	………	三八
草稿 4	(資料)	四二
草稿 5	………	五五
草稿 6	(資料)	六〇
草稿 7	………	六二
草稿 8	………	六七
草稿 9	………	七五
草稿 10	屋嶋	七八
草稿 11	(資料) 歸る旅	八二

草稿	12		八六
草稿	13		九八
草稿	14	尾道へ行く前	二四六
草稿	15		二五二
草稿	16	「播摩」	二五四
草稿	17	(資料)	二五七
草稿	18		二六〇
草稿	19		二六二
草稿	20		二六六
草稿	21	不孝者或は「信行遺稿」	三一六
草稿	22	(資料) 女に關して	三二四
草稿	23	時任信行	三二七
草稿	24	(資料) 仁田の怪我(實話)	三三〇
草稿	25		三三一
草稿	26	(資料)	三三四
草稿	27	慧子の死まで	三三五

草稿	28	暗夜 あみや 行路 かうろ	三三九
草稿	29	死んだ時任	三四九
草稿	30		三五二
草稿	31		三五五
草稿	32		三五八
草稿	33	(資料)	三六〇
草稿	34	暗夜行路後篇	三六三
草稿	35	(資料)	三六五
草稿	36	(資料)	三六七
後記			三六七

暗夜行路草稿

1

ゝ

36

〔暗夜行路草稿 1〕

祖父が祖母を脊負つて掛櫓子のやうに弱々しく且つ急な段櫓子を登つて行くのを下から見上げて居た自分を覚えて居る。其二階には祖母の使つて居た機があつた。

祖父に負はれて居た祖母は脳病で危い時だつたさうだ。直つても半身不隨意になると醫者が云つて居たさうだ。

新築の家を大婆アさんと云つてゐた祖父の嫂に負ぶさつて見に行つた。床板を張つたばかりの所を大婆アさんが下駄のまゝ歩いて此所がお茶の間になるのだと教えて呉れたのを覚えて居る。

新築の家に引移つた。自分は母と一緒に寝て居た。母がよく眠つて居るのを幸自分は床の中に深くもぐつて行つた。間もなく自分は眠つて居ると思つた母から烈しく手をつねられた。母は邪見に枕まで自分を引き上げた。

然し母は眠つて居る人のやうに眼も開かず口もきかずにそれをした。自分は自分のした事を全く耻じた。自分は泣く事も出来なかつた。

或日祖母が戸棚に到來物のようかんを仕舞ふ所を見て、自分はそれを食ひたいとねだれ出した。祖母はどうしても呉れなかつた。自分はあばれ出した。すると祖母が疳癪を起こしてイキナリ切つてないようかんを掴むで自分の口へ押込むだ。自分は吃驚して泣き止むだ。

或日自分は初めて柿の木の高い枝にとまつた油蟬を見た。小さい蟬しか見た事のない自分は大きい蟬が居るものだと驚異したのを覚えて居る。此記憶が轉化して自分の小供時分は今程油蟬は居なかつたといふ氣を何時までも自分にさして居た。

相手が誰れだつたか覺えない。同年位の子供と「坊や」と云ふのは自分の事だと互に主張し合つた事があつた。

女中に負ぶさつて町に祖父の食パンを買ひに行つた。

自分は歸り其パンの包みを女中の脊で持つて居た。新シ橋の上へ來た時、濠に緋鯉が浮いて居ると云ふので女中も一緒にそれを見て居た。すると通りがりの誰れかゞ引き抜くやうに其パン包みを持つて行つて了つた。自分は其後姿を見送つた。それは割りにいゝなりをした若い女だつた。

舊藩主の殿様が死んだ。自分が出掛けて行つた時棺の前には澤山な供物ととも、された蠟燭とがあつた。人間の死骸を見た事のない自分には「死んだ」といふのがよく解からなかつた。自分は其所に坐つてゐた女中の頭に殿様はどう遊ばしたかと訊いた。女中の頭は殿様はもうおかゝれ遊ばしましたと答へた。自分は直ぐ「隠れん坊」を想つた。自分は棺の後ろにたて廻はしてある屏風の裏を覗きに行つた。女中の頭は笑つた。而して此所で何か殿様に藝當を御覽に入れて下さいと云つた。自分はデン

グリ返えしを二三度して見せた。女中の頭は三寶にのつてゐる立派な菓子^を包むで呉れた。

芝の青松寺で殿様の葬式があつた。自分は小さい釣鐘の響にすつかりおびやかされた。又鳴らすだらうと思ふと居ても起つても居られないやうに不安になつた。而して再びそれが鳴り出した時にとぅゝ我慢出來ずに泣き出した。自分は鐘を大きな^{しく}でたゝいてゐる坊主を無慈悲な奴だと思つた。釣鐘は其後見るだけでも自分には恐しかつた。

自分は満三才を過ぎた。芝公園の幼稚園に通ふ事になつた。其入園を祖父と頼みに行つた記憶があるが、それが今は其頃目白の雜司ヶ谷の鬼子母神に蟲封じをして貰ひに行つた時の記憶とゴチャ／＼になつて了つた。

幼稚園では好きな人が二人出來た。一人はMと云ふ姓の女の子で、それは少しも美しい子ではなかつた。性質

も優しい方ではなく、女の癖に妙に男の子等に對し威張つて居た。自分は何故其女の子が好きだつた解からない。美しい女の子は其他に澤山居た。それなのに自分の注意はいつも其女の子に惹かれてゐたのを覚えてゐる。其女の子は常に洋服を着て來た。然しそれが自分を惹きつけたわけでもあるまい。

もう一人は河合先生と云ふ若い女教師だつた。小柄な美しい而して性質も優しさうな人だつた。自分は河合先生と云ふのは此人が可愛い顔をしてゐるから左う云ふのか或は始めから左う云ふ姓なのかハッキリ判斷出來なかつた。

母の實家は下谷の根岸にあつた。或日母に連れられて其所へ行つて居た。自分は其所で眠つて了つた。夜になつて歸る爲めに母は自分を起こした。其時母は立つてゐて仰向けに寝た自分の兩手を引張つた。其拍子に片方の肩の關節がぬけた。自分は暗い田舎道を人力車で母に抱かれて行くのを覚えてゐる。千住の名倉に連れて行かれ

たのだ。

此脱臼は其後癖になつて、一度は寢床の上で祖父と角力を取つてゐてぬけたし、一度は幼稚園で凜車ごつこをして轉んだ時機の角にぶつけてそれがあつた。

正月だつた。御殿と云つてゐる舊藩主の家でお光婆アさんと云ふ八釜敷屋の老女中からトソを飲まれた。自分は何杯も飲んだ。それは非常にうまかつた。お光婆アさんは面白がつて注いで呉れた。——次に憶ひ出せるのは建仁寺垣に右肩をつけて垣根をコリ／＼と音をさせながらやうやく歩いて居る自分の姿である。偶然四つ上の叔父が通りかゝつた。自分は直ぐ自家へ連れて行かれた。醫者が來た。自分は炭酸水を飲まれたのを覚えてゐる。大した事ではなかつたが一時病人のやうになつて了つた。祖母はお光婆アさんの無謀に腹を立てた。

或日自分は隣家の物置きに掛けてあつた櫓子から屋根へ登つて見た。二軒棟續きの長屋になつてゐたから棟傳

ひに自家の屋根へ來た。自分は多分初めてそんな高い所へ登つたのだ。間もなく祖母が庭へ飛んで出て來た。其氣配で自分はこれは怒こられるぞと思つた。所がどうしたのか祖母は氣配に似ない優しい調子で「其所でジツとしておいで」と云つた。祖母が見張つてゐるので自分は逃げる事も出来なかつた。間も誰れか屋根へ登つて來た。案の定降りると自分はヒドク怒られた。

實際親類ではなかつたが親類關係に近い關係の醫者の娘が自家に來てゐた。五つか六つ自分より年上だつた。其前此娘の姉が來てゐたがそれが結婚して今度は其妹が來たのだ。姉は美しい優しい人だつた。其人を自分は好きだつた。然し妹はそれ程美しくなかつたし、性質も姉とは異つてゐて自分は何方かと云へば嫌ひの方で四つ上の叔父と一緒によくイヂメた。竹箒を持つて追ひ廻し便所へ隠れた所を外からメ込んでやつたのを覚えてゐる。所が此娘は毎朝自分を起こし着物を着せる役目をしてゐた。而して起こす時例として屹度夜着の裾からもぐつて

來る。その首を自分は股の間でギユツとメめつけた。それは或る快感であつた。自分はこれをしてからでなければ起きなかつた。何方がこんな事を始めたかは覺えないが、娘がそれを喜んでゐたやうに自分にも思へた。

隣家に自分より三つ年上の子供がゐた。或日四つ上の叔父と内証で何かコソ／＼とやつてゐるのを自分は氣がついてゐた。暫くして何氣なく自分は椽の折れ曲る戸袋のある少し暗くなつてゐる所へ來ると其所の壁に恐しい顔をした入道の化物が下がつて居るのを見た。自分は非常に吃驚した。

或日自分は四つ上の叔父と隣家の子供とに前夜見た夢の話をした。御殿の玄關にある大きいつい立ての下からかういふ風に（と自分は兩臂を張り開いた指をカギにして見せ）龍が顔を出して居た夢だと話した。すると四つ上の叔父が餘りウマ過ぎる、ウソだらうと云つた。自分はウソではないと云つたが二人共信用しなかつた。自分

はウソツキと云はれるのが腹が立つた。どうしても本統だといつて我を張つたが二人は意地になつてウソにしやうとした。自分は幾ら云つても自分の夢の中の事實を他人に証明しやうがなかつた。自分は口惜しいと思つたのでそれをよく覚えて居る。

夕方に近かい頃だつた。叔父と隣家の小供と三人で庭で遊んでゐる時二人が同時に空をさして「あゝ、あんな物が飛んで行く」とそれを指で追つた。其方を見たが自分には見えなかつた。すると間もなく南佐久間町にゐる親類の娘が今眼を眠つたといふ知らせが來た。光り物は其家の方から飛んで來たのだ。

「御馬場」といつてゐたが、もう馬場の形もなくなつてゐる所に一本大きな^{せき}檀の木があつた。それは秋の靜かな午前だつたやうな氣がする。自分は獨りで其所でせん檀の實を集めてゐた。すると一羽の鳥が食パンの大きな片れをくわへて來て其所の大きいごみ捨場のごみの中

にそれを隠して、又何所かへ飛んで行つて了つた。暫く經つと今度は一疋の犬が來た。而して切りに其邊を嗅ぎ廻はつてゐたがパンを嗅ぎ當てると掘出して直ぐそれを食つて了つた。自分は其時鳥は馬鹿な鳥だと思つた。

或日四つ上の叔父と隣家の子供とが砂で富士山を作つてゐた。雪は頂上から鹽を降らしてそれに代へた。自分は蜜柑を食ひながら感服して見てゐた。不圖自分はウマイ事を想ひ着いて、蜜柑のト袋を山の中腹に置いて、人間が山から滑り落ちた所だと云つた。叔父が急に怒つた。自分は何故怒るのか解からなかつたが直ぐ逃げ出した。逃げながら振り向くと叔父が石を投げやうとする所だつた。自分はそれを避ける氣で首をすくめ出来るだけからだを右へ屈げて逃げた。然し石はウマク頭へ當つた。切石のかけらだけに頭へ切れ込んで自分は背へ一杯血をあびて歸つて來た。叔父も驚いた。叔父も歸つて來て自分と一緒に泣いた。醫者が來て傷口へまくれ込んだ髪の毛を一本／＼ピンセットでつまみ出してから治療をほど

こした。大事にはならなかつたが、其跡は未だにハゲになつて残つてゐる。

それから餘り間もない事のやうに思ふ。或夕方叔父が脊後から自分の肩によりかゝつて二人で椽側を歩いてゐた。もう部屋の中が暗くなつたので椽へ近かく盤を持出して祖父と客とが碁を打つてゐた。自分は何氣なく其所へ來た時坐らうとした。と、墮勢で叔父が前へのめつたから自分も一緒に突き倒された。其拍子に碁盤の角でイヤと云ふ程眼のふちを打つた。切れて血が出た。祖父等は眼をつぶしたと思つて驚いた。それも間もなく直つたらしいが傷跡は今も左の眼の下に残つてゐる。

〔原稿用紙改まる〕

幼稚園では其朝の登園順が直ぐ其日の席順になつてゐた。その印には登園した時當人が自身で木札を其場所にかける事になつてゐた。自分は大概始まる一時間前には登園してゐたがいつも一番の札は或公爵の子供が取つて

ゐた。それは實際其子供が來てかけるのではなかつた。おつきの女が小使にでもさせてゐたのか幼稚園の方で左うしたのか解からなかつたが何しろそれは不公平であつた。然し自分はそれに別に不平らしい氣持を感じなかつたやうに思ふ。

東京に幼稚園の餘りない頃で其幼稚園も寺の跡をそのまゝ使つてゐたから室内運動場には大きな佛壇などがあり、自分等は朱塗のケンドンを開けて其佛壇の下に入られるのを恐しがつた。生徒の大半は華族の子供だつた。ピカ／＼した自身の顔程大きいきん着を下げて來る子供がゐた。自分では氣にもしなかつたが自分などが或は最も貧棒人の子供だつたかも知れなかつた。然し當時の記憶をたどつて見て自分はそれらの子供に對しヒガミらしい感情を持つた事はなかつたやうだ。

同じ級に或侯爵の美しい娘がゐた。自分はそれに別に愛情を持つてもゐなかつたが、それは御姫様らしい上品な音なし人で且つ親切な人だつた。自分は自分で出來

ない折物をよく此少女に作つて貰つてゐた。

或日歸る前の當番が自分と其少女に當つた時、自分はネン土細工に使つた板片を仕舞ひに行く路、急にイヤになつて其少女と一緒に持つて行つて貰はうとした。自分は後からついて來た少女に投げてそれを渡さうとした。所が少女はそれを受損じた。廣い板廊下にけたゝましい音をたてゝそれが落散つた。所へ谷口といふヒステリックに意地惡なチバレッ毛の女教師が來掛つた。自分はヒドク怒られた上に、留置きを食つた。歸りの俚の上で自分は泣きながら來た。車夫が慰めてくれたが自分はそれに少しも親しみを感ぜなかつたので慰められやうとしなかつた。

愛宕山の裏に大きい寺がある。其所の光ケン坊主といふ憎々しい子供が幼稚園に來てゐた。自分はその子から後に思へばベースボールに使ふ堅いボールを貰つた。其爲めに又留置きを食つた。其ボールは自分が貰ひたがつて貰つたものではなかつた。向ふで呉れやうとしたので貰

つたのであつた。自分は留置きを食つた時には自分が何といふ事なし悪い事をしたやうな氣になつた。然しそれをする時には別に悪いとも思はずにしてゐたのだ。した結果の罰がした事の善惡を教えてくれたに過ぎない。然しそれはもつと小さい時母と一緒に寢てゐて眠つてゐる母から手をつねられた時のやうに全く心から耻を感じるとは甚だ異つたものであつた。而して又、或日の事組木で自分が自分勝手に作つた門と家とが先生に大變讀められた事があつた。その爲めに金かな具のついた赤いモロツク皮の手帖を自分は先生から貰つた。自分は美しい手帖で喜んだ。然し何故こんな物を貰ふ程に自分のした事がいゝのか全く解からなかつた。自分は何んとなく先生の氣まぐれのやうにそれを感じた。

或日光ケン坊主の寺にお玉じやく子を捕りに行つた事がある。立派な庭に大きい池があつてお玉じやく子が澤山に泳いでゐた。若い坊主が二人出て來て捕る手傳ひをして呉れた。其時その坊主達がホオ齒の足駄の二本ある

鼻緒の一方だけ足の平に踏敷いた穿き方をして見せて、「これは天狗の穿き方だ」といつて教えて呉れた。自分は半信半疑だつたが、それが妙に頭に残つて後にも自身そんな穿き方をして見て半信半疑した事があつた。

車夫が一寸用があるからと云つて幼稚園の歸途自家とは反對の方に自分を乗せたまゝひいて行つた。今思へば飯倉の四辻の所だつた。かぢ棒を下ろして何所かへ行つて了つた。自分は云はれた通り俚の上で待つてゐた。随分時間が経つたやうな氣がして來たが車屋は未だ歸つて來ない。自分は段々不安になつて來た。何か車夫に惡意がありさうな氣がして恐しくなつて來た。自分は俚を降りた。知らない町で急に心細くなつた。泣きながら歩き出したが自家までは大變遠いやうな氣がした。丁度幼稚園から歸りの子供に會つてそのおつきの女が再び幼稚園の前まで送つてくれたので後は一人で歸つて來た。暫くして車夫は心配顔をして歸つて來た。車夫は自分のゐなくなつたのを驚いて其邊を探し廻はつたといつた。

或夕母が椽側から手を延ばして軒にかけた物干竿を扱つてゐる内誤つてそれを取落した。所が丁度その下に祖父の可愛がつてゐた獵犬がゐて其頭にそれが當つた。犬は暫く弱つてゐたが遂に氣が違つて他の人を噛むだ。犬の病氣は直らなかつた。とう／＼何所かで殺されて了つた。自分は人を噛む前にもよく其犬をおもちやにしてゐた。氣が違つてからも犬が自分を知つて噛まなかつたと思つて尙犬を可哀相に思つた。

舊藩主の屋敷内には澤山の子供がゐたが、自分と同輩の者は二軒程おいた隣りの女の子一人だつた。眼ぶたのふくれた、いつも眼の悪い醜い女の子であつた。その聲も愉快な感じはしなかつた。然し性質には不愉快な所が少しもない子供であつた。自然自分はこの女の子とよく遊んでゐた。四つ上の叔父や隣りの子供は女の子と遊び自分^びを惡口した事もあつた。それでも自分はこの女の子と遊んでゐた。左^{ひだり}して何ういふ場合からか覺えないが

自分は此女の子と情慾的な關係で遊ぶやうになつた。自分は夫婦といふ代りに其女の子をお母さんにして遊んだ。二人は他に隠れて遊んだ。自分は此女の子を前に幼稚園で好きになつた女の子のやうに愛してはゐなかつた。自分にも此女の子の顔を醜いといふ氣はあつた。然し嫌ではなかつた。二人はキタナイ真似をした。自分には其頃から多少潔癖があつた。キタナイ事には割りに神經質だつた。それにかゝはらず情慾がキタナイ事で満足を感じやうとした。二人は情慾の事に無智であつた。どうすればいゝか知らなかつた。それが妙な現はれ方をしたのである。此關係は自分が學習院の初等科に入る頃から何時かなくなつた。

京橋鎗屋町に親類がゐた。或日祖母に連れられて遊びに行く toward 自分だけ泊つて行かないかと云はれた。未だ日の暮れない内だつたので自分は其氣になつた。日暮れに祖母が歸つて行つた。其所には養女で自分より五つ程年上の額の人並より大きな（マコ）のが惡かつたがそれを除け

ば美しい娘がゐた。其娘が自分を抱いて寝ると云つてゐた。寝る時が來ると娘は自分を玩具の人のやうな氣持で喜びはしやいで自分の世話を焼いた。が其時は自分は段々心細くなつてゐた時だつた。寝ると直ぐ自分は悲しくなつてメソ／＼しだした。娘は切りと慰めた。自分はどうしても歸ると云つた。とう／＼夜晩くなつて歸つて來た。

それから間もない頃であつたかと思ふ、祖父母と四つ上の叔父と四人で塔の澤に一泊小田原に一泊江の嶋に一泊の旅をした事があつた。塔の澤から小田原へ歸る日は丁度雨が烈しかつた。自分と叔父とは一人乗の俥に並んで腰かけてゐた。今思へば風祭りから早川に添ふた崖の上の路を來る時だつた。俥が烈しく左右に揺れるのが二人に面白かつた。二人は母衣の中で揺れ方に合はしてその傾く方に故意と烈しく身體（からだ）を振つてゐた。俥が倒れた。幸に崖と反對の側に倒れたので二人共別に怪我をしなかつた。